韓国キリスト教会における生き方の変化：プロテスタントとカトリックという生き方をめぐって

秀　村　研　二

はじめに

本論は、近年の韓国社会で顕著になっているキリスト教におけるカトリック教会の存在感の増大とその意味するところについて論じる。2014年８月にローマ教皇フランシスコが韓国を訪れたが、韓国のメディアは教皇の一挙手一投足を伝え、カトリック信者ではない人々も教皇フランシスコの言葉に癒されたと語った[1]。教皇フランシスコの訪韓ほど現在の韓国社会におけるカトリック教会の存在を印象づけるものはなかったかもしれない。そしてそれは1984年と1989年に教皇ヨハン・パウロ２世が訪韓したのを機にして信者数が増加したことを思いおこさせるものであった。

韓国では人口センサスで宗教の統計がとられているが、近年のものでは1985年、1995年、2005年である。この統計でプロテスタント・キリスト教関係者に衝撃を与えたのはカトリック信者の増加であった。逆にプロテスタント信者は減少傾向にある[2]。少なくとも1945年の日本による植民地統治からの解放以後、一貫して信者数を増加させてきたプロテスタント・キリスト教は1990年代に入ると信者数の増加が鈍化し、減少傾向に入った。

この変化は韓国社会にみられる他の変化とも連動していると考えられる。1960年代から1980年代までの軍事政権下における高度経済成長期にはプロテスタント教会は信者数を伸ばし、1980年代末の民主化を経て1993年からの金泳三大統領の文民政権下以降ではプロテスタントよりはカトリック信者数の伸びが顕著となっている。この時期に韓国は経済的に「世界化」を果たし、先進国入り（OECD 加盟国）を実現させた。一方では1997年末からの IMF 危機（アジア経済危機）、2008年のリーマンショックは韓国の社会的不均衡をより露わにすることになった。近年の社会的格差の顕在化は、人々に1960年代からの高度経済成長下での人々の営みとは異なる生き方を求めさせることにもなる。

本論はこれまでおこなってきた韓国のプロテスタント教会の民族誌的調査を踏まえながら［秀村　2015］、近年の社会状況の変化の中でのプロテスタント教会とカトリック教会について考えるものである。なおプロテスタント教会の知見はこれまで調査などの延長線上にあるが、カトリック教会に関しては2015年春の予備的調査と2015年の夏におこなった２週間ほどの調査によるもののみである。カトリック教会に関しては、今後継続して調査を進めていく予定である。

---

[1] 2014年8月16日午前にソウル市の中心部にある光化門広場で朝鮮王朝によって迫害を受け殉教した123人の信者の列福式（福者に列する）がおこなわれ、その模様はテレビ中継された。教皇の言葉は詳しく報道され、特に2014年４月に起きた修学旅行の高校生などを乗せたフェリー「セウォル号」の沈没事故での犠牲者家族への慰藉に関心が寄せられた。韓国内でのミサで繰り返された教皇による寛容を強調する言葉が多くの人々の記憶に残ったという。

[2] 韓国ではキリスト教はプロテスタンティズムとカトリシズムに明確に区分される。プロテスタンティズムは改新教（kyesingyo）または基督教（kidokkyo）、カトリシズムは天主教（ch'eonjyukyo）と呼ばれる。信者の多くは、互いに同じキリスト教信者とは見なしておらず、別の宗教と考えている。

2．プロテスタントとカトリック

2-1. プロテスタントとカトリック：宗教人口統計から

韓国統計庁が発表した『2005年人口住宅調査』によると韓国の人口は約4704万1000名（ただし外国人は除外）であり、その中で宗教を持っている人が約2497万名で全国民の53.1％、その中で仏教信者が約1072万6000名で22.8％、プロテスタントが約861万6000名で18.3％、カトリックが約514万6000名で10.9％である。宗教人口の中で一番多いのは仏教徒であるが、プロテスタントとカトリックを合わせたキリスト教信者は30％近くになり仏教徒よりも多い。

1995年の統計では、宗教人口は国民全体の50.7％であったので、宗教を持っていると認識している人が10年間で若干増加していることになり注目される。1995年の宗教別信者数と比率は、仏教徒は約1032万人で23.2％、プロテスタントが約876万人で19.7％、カトリックが約295万人で6.6％である。カトリックはこの1995年から2005年の10年間で信者数が約220万人増えているがこれは74.4％の増加である。反対にプロテスタントは信者数を減らし、マイナス1.6％の減少である。なお仏教信者、プロテスタント、カトリック以外の宗教信者としては円仏教を始めとする新宗教の信者もいる。その中で円仏教はこの10年間で信者数を50％近く増加させて約130万人としており注目される。なお民俗宗教である巫俗（シャーマニズム）は明確に何らかの宗教の信者であると認識されることは少ないため信者数として統計には現れることはほとんどない。同様に儒教も祖先祭祀などの儀礼をおこなう人は宗教の有無に関わらず数多く存在するが、宗教として認識されることはあまり無く、統計上にもほとんど現われない。

統計庁の調査が韓国の宗教人口を正確に反映しているわけではない。ただ回答者が宗教を持っていると答える場合、韓国の仏教には檀家制度はないので仏教徒は何らかの形で寺院と関係しているだろうし、キリスト教の場合には洗礼を受けていなくても教会と何らかの関係を持っていると考えられる。少なくとも、何らかの信仰を持っていると認識していると考えられる。

韓国のプロテスタントとカトリックに関して ISPSR が2008年におこなった「韓国総合社会調査」がある。これを使用してアメリカのキリスト教信者の事例と比較して社会学的に分析したチョ・セフィとイ・チェヒョクの分析を紹介する［조세희・이재혁 2013］。1508名に対する宗教に関する設問調査の結果でその割合は、プロテスタントが25.9％、仏教徒が23.8％、カトリックが9.0％である。宗教に関する態度では、カトリックに比べてプロテスタントが信仰では熱心、他宗教に対しては排他的、教会活動には積極的に参与するとの結果が得られ、組織の厳格さもプロテスタント教会が強い。そこで厳格な組織を持つプロテスタント教会の方が現在衰退しているのは何故かという疑問をたて、この10年間で宗教人口が増えている点に注目して以下のように述べる。

宗教を持っていない人々のカトリックに対する好感度が49％であるのに対してプロテスタントへの好感度は19.5％に止まり、好感度でカトリック教会の優位は圧倒的である。反感は逆にカトリックが13.3％に対してプロテスタントは37.8％である。さらに既存の信者の満足度ではカトリックが91.1％に対しプロテスタントは85.7％である。他の宗教を信じたことがあるかという質問に対し、カトリックは28.1％がそうだといい、改宗率が高い。その中でプロテスタントからの改宗は13.6％、仏教徒からは13.5である。カトリックに改宗した信者の62.3％がプロテスタントからの改宗であり、他方仏教への改宗者の79.3％がプロテスタントからである。プロテスタントの場合は68.4％が過去に仏教徒であり、カトリックからの改宗者は25％に過ぎな

い。この点から、カトリックからの改宗（離脱）が少なく、非信者からの好感度が高いことからカトリック信者の増加とプロテスタント教会の衰退を説明している。結論としてプロテスタント教会や仏教界が教派分裂や内部競争構造をみせて社会にその問題を露出させていたのに対し、カトリック教会は一体感を持ち、1990年代以後に寛大さや宗教の市場競争構造に対して最適な状態にあったと推測している。

2-2. プロテスタント教会の問題点について

1990年代からのプロテスタント教会の信者数の減少については、信者数の減少を受けてそれまでの韓国プロテスタント教会の在り方と問題を批判的に捉え、将来への展望を探ろうとする著作が生まれ、日本語にも翻訳され紹介されてきている。特に進歩的とされる牧師や神学者たちから保守主義の教会批判という形でなされることが多い。崔亨黙・白賛弘・金鎮虎の『無礼者たちのクリスマスー韓国キリスト教保守主義批判ー』［최형묵，백찬홍，김진호 2007］や金鎮虎『市民K、教会を出るー韓国プロテスタントの成功と失敗、その欲望の社会学』［김진호 2012］などがそれである。崔亨黙は韓国のプロテスタント教会がアメリカの福音主義の影響を強く受けて、信者の数と教会堂の大きさや個人の社会的・経済的成功を神の恵みとして独善的、排他的になったことが問題であるとする［최형묵 2009］。

韓国には歴史学の一分野として教会史が成立している。それを成り立たせているのはプロテスタント教会が多くの教派に分かれており、その教派ごとに神学校を持ち、そこでは教会史の講義がおこなわれるため研究者が養成されてきたためだし、いくつかの教会史の研究所も存在するからである。カトリックでも同様である[3]。その教会史の立場からも1990年代以降のプロテスタントの信者数減少とカトリックの増加に関しては関心が持たれている。例えばキル・ソンゴンは「高度成長以後の韓国教会：宗教社会学的考察」［길성건 2013］で、プロテスタント教会の成長要因[4]に関する研究にはシャーマニズムとプロテスタンティズムの関連、資本主義的経済発展との親和性に関して研究が不足していたと指摘する。高度経済成長期の経済成長モデルを指標としてしまったために、1990年以後のプロテスタント教会の低成長時代に個別教会間の過度な競争に陥ってしまい、巨大教会がより大きくなるというプロテスタント教会における格差の拡大が起こったという。そのためにプロテスタント教会は批判を浴び、逆にカトリック教会の信者数の増加を招いたと指摘する。

これらの研究でプロテスタント教会の成長要因とされているのが高度経済成長との関連についてである。さらにプロテスタント教会の問題点として政治との関連が問われている。ユン・キョンノ「分断70年、韓国キリスト教の権力癒着の事例とその性格」では、解放後のアメリカ軍政期から朴正熙政権に至るまで保守的なキリスト教会が権力と親密な関係にあり、それだけではなくそこに集まる企業人信者と権力との関係があきらかにされる［윤경로 2015］。この権

---

[3] 韓国の教会史の研究の関心の対象はほとんどが韓国に関するものである。韓国への宣教、韓国を宣教対象としたミッションの動向、韓国で宣教した宣教師たちの生き方と活動、韓国でのキリスト教の受容、韓国におけるキリスト教の展開、韓国の個別教会の歴史などについて膨大な研究成果がある。自国への関心の高さに比するならば韓国以外の地域への関心は薄いと言わざるをえない。この教会史の研究のあり方は韓国のナショナリズムの在り方として考えても興味深い。

[4] 韓国のキリスト教（特にプロテスタント教会）では量的拡大を成長と捉える。信者数の増加や教会堂の立派さなどが神からの恩恵を表わすものと考えられ、牧会者は恩恵を実現するためのものとして成長を強調する。それを良く示しているのが信者数１万人を超す巨大教会（メガ・チャーチ）の存在である。ソウル市内だけでも20を越す巨大教会がある。

力との癒着構造はその後の軍事政権（全斗煥政権と盧泰愚政権）に引き継がれただけではなく、文民政権となった金泳三政権では金泳三が教会の長老であったこともあり持続され、また2008年に発足した李明博政権ではかつて企業人であった大統領自身が長老であっただけでなく政権閣僚の半数がプロテスタントであったこともあり、より強化された。李明博政権初期には閣僚による仏教批判の発言が相次ぎ仏教界からの反発を招くこともあった。

1990年代以降、信者数１万人以上の巨大教会をめぐる問題が韓国社会で話題となり批判されるようになる。一つには巨大教会において父親から息子へと様々な利害と結びついた牧師職を譲り渡す世襲問題、教会内部の牧師や長老など有力メンバーによる不明瞭な資金運用をめぐる財政問題、教会をあたかも牧師個人の所有物のようにみなす私有化問題などが起こったことも、プロテスタント教会に対する社会の信頼を薄くさせた要因となった。

３．カトリックへの改宗者が語るプロテスタント教会

3-1. 改宗者Ｊ氏

ある60代男性がなぜプロテスタントからカトリックに改宗しようとしたのかについて語ってくれたので紹介し、そこから何が考えられるのかについて示してみたい。あくまでも一人の個人的な話しであり、韓国全体のこととしては一般化は出来ないのはもちろんだが、一つの例ではある。

慶尚北道の洛東江左岸にある古くから渡し場があったウェグァン（慶尚北道漆谷郡倭館邑）所在のウェグァン聖堂（Seongdang）に2015年５月から通い出した1950年生まれの男性Ｊ氏である。話しを聞いた時点（2015年８月）ではカトリックの教理を学んで洗礼を受ける準備をしている段階であった。

Ｊ氏は慶尚南道で生まれ、中学校からは慶尚北道の中心都市テグ（大邱）で学校に通った。大学卒業後も法律家をめざして勉強したが合格することが出来ず、30代になってから金属加工の工場を始めた。大学在学時に徴兵で軍隊に入り、そこでプロテスタント・キリスト教と出会った[5]。洗礼を受けたのは27歳の時でそれ以来、礼拝には熱心に通っていた。1992年にウェグァンに工場を作って引っ越してきたのでW教会（長老派）に通うようになった。熱心な信者であったので、信者から選ばれて教会の役職者である按手執事（Ansu-Chipsa）となり、教会の会計係を長年勤めた。韓国の長老教会は牧師と長老とで最高議決機関である堂会（Tanghwea）を組織するが、按手執事は将来の長老候補であるとともに教会運営の実務を担う役職である。なおW教会は礼拝出席者数500-600人の中規模の教会である。Ｊ氏は毎日曜の礼拝と午後の夕拝には出席していたが、水曜日と金曜日の夜の祈祷会には仕事のために出席は出来なかった。

3-2. ウェグァンのカトリック

ここでウェグァンのキリスト教（カトリック教会）について簡単に述べておく。前にも述べたように2005年の韓国のカトリック信者の割合は全人口のほぼ１割に当たる10.9％である。ウェグァンは漆谷（チルゴック）郡の郡庁がある人口32000人の地方の邑（日本の町に当たる）

---

[5] 韓国の軍隊では牧師や神父が配属されており、日曜日には礼拝やミサが部隊内の教会でおこなわれる。厳しい訓練の中での休息の場ともなり、軍隊で入信する人は少なくない。

なのだが、カトリック教会としては３つの聖堂があり（大邱教区所属）信者数は約6000人である。これは全国平均の２倍の信者がいることになる。プロテスタントもほぼ同じくらいの信者数である。ウェグァンには比較的早い時期にカトリックの聖堂が作られたが、そのために全国平均の倍の信者がいるわけではない。なおウェグァンに最初に建てられたカトリック教会は洛東江の渡し場があったカシル聖堂で1895年に建てられた。

ウェグァンには、2016年に創立80周年を迎えるカトリックの純心学園が運営する純心中学校、純心高等学校、純心女子中学校、純心女子高等学校がある。そして純心学園の男女それぞれの高等学校がウェグァン邑にある唯一の高等学校である。そのため鉄道やバスを使って公立高校や他の学校に行こうとしない限り純心に通うことになる。それなのでウェグァンにはこのカトリックによる学校の卒業生が多く、ウェグァン邑内にある漆谷郡庁においても卒業生のネットワークが大きな意味を持っていると語られる。つまりこの地域には長年にわたる教育を通してカトリックへの親近感が培われていたといえよう。

さらにもう一つの要因となるのが修道院の存在である。ウェグァン邑の旧市街の外れには大きな敷地を持つ聖ベネディクト会ウェグァン修道院が位置している。元々韓国におけるベネディクト修道会（芬道会）は1909年にドイツのオッティリエン修道院（St. Otilein）から派遣された修道士に始まり、1910年にソウル東小門外に修道院が設置された。その後1927年に現在の北朝鮮である元山近郊の徳源（トクウォン）に修道院を移して宣教活動をおこなった（徳源修道院という）。しかし1945年８月の植民地からの解放後、ソ連の支援により成立した労働党政府によって1949年に強制的に閉鎖され、修道士たちは収容所に送られてしまった。朝鮮戦争後に活動先を韓国に移動し1952年にウェグァンに修道院を移して再開した。なおこの過程で37名の修道士、修道女、司祭が殉教した［왜관수도원 2009］。ベネディクト会は労働を重んじる修道会で修道院内には、出版社、印刷所、家具工場、金属細工工房、ステンドグラス工房、農場などがあり修道士が作業に当たるとともにそこで働く労働者を雇い入れる雇用の場ともなっている。また前述のカシル聖堂の近くに修道院が運営する老人ホームがあり、純心学園も大邱教区の運営だったが現在では修道会によって運営されている。

ウェグァンにおける雇用の場にもなっている修道院の存在は大きく、またウェグァン聖堂によって設立された金融組織（信用組合）は創立時期が早かったこともあり公的金融機関が一般化する前の一時期は邑内において影響力も大きかったという。このような教育と修道院という背景からカトリック教会のウェグァン地域における影響力は大きい[6]。

またウェグァン地域を考える上ではウェグァン邑近郊に位置する米軍部隊をみのがすわけにはいかない。この部隊は韓国内の米軍部隊の補給基地となっており、この地域の多くの人々の雇用の場となっている。

3-3. 改宗者Ｊ氏の語り

プロテスタント教会の熱心な信者であったＪ氏がカトリックに改宗したのは次のような経緯からである。

私は教会の会計係をやっていたため教会の財政状況についてある程度事情が分かっていた。牧師が教会の財政（予算・決算）について信者に一切公開をしないことに疑問を持ち始め、

[6] カトリック教会（聖堂）の神父は教区の教区長によって任命されるが、ウェグァンに所在する聖堂の神父は全て聖ベネディクト会ウェグァン修道院所属の修道院長によって任命される。聖堂は大邱大教区に所属し、聖堂の神父も教区長の指揮下に入るとは言え修道院の影響力は大きい。

それが教会運営全体への不信感となっていった。牧師には会計担当の按手執事という役職から財政の公開を何回も申し入れたが聞いてもらえなかった。また長老たちにも堂会で問題にするようにと訴えたが、12人いる長老たちは３つの派閥に分かれていて、お互いに政治的力を握ろうとして争っており、取り上げてもらえなかった。この牧師と長老たちに対する不信感と失望からプロテスタント教会の問題を考えるようになった。

Ｊ氏によると現在の韓国のプロテスタント教会は教理的にも、制度的にも、財政的にも問題が多くあり、信者に常識があるならば疑問を持って当然だ。ただ多くの信者は、疑問を持っても直接自分自身と関係が無い限りそのままにしておくのだろうと語る。

最初に気になりだしたことは、牧会者（牧師）がとても自己中心的で教会を独占して支配していることだった。教会が社会に対して広がりを持たず、その教会（個別の教会）で完結してしまう個教会主義に対して疑問をもち、宗教が俗的なものとなり巫俗信仰（Musoksinang）になっていると思った[7]。人を救うはずの教会が自分の教会のことだけを考えていて排他的になっている。自分たちだけが上にあがって行けば良いと考えていて、自慢ばかりをするが社会的な活動はしない。W教会はある程度の信者数がおり財政的には十分な資金を持っているが、困っている人たちのために本当にそれを使っているわけでは無い。同様にソウルなどの大都市の大きな教会は豊かではあるが、農村の小さな教会は運営も難しく教会を維持できなくなっている。社会で貧富の格差が話題になるが、教会の貧富の格差はとても大きくひどすぎると思う。大きな教会の牧師は大金持ちになっている。

そのような牧師たちは説教は旨く、信者たちは心地良くなるのだろう。信者は牧師の説教が良いと集まるが、それは信者の本当の信仰心ではないと思う。礼拝は神に捧げるものではなく、教会や牧会者のための金を集めるチャンチ（お祭り騒ぎの宴会）になっていて、聖書に書かれていることとはかけ離れていると思う。

礼拝でおこなわれる通声祈祷（T'ongseong-Kido）にも違和感を覚える[8]。教会の礼拝でも通声祈祷をおこなうよう奨められたが自分は一回もしなかった。信者が自分の欲望を丸出しにしているようで巫俗信仰か祈福信仰のようだと思う。律動（Yultong）も最初は拒否感があったが、それにはだんだん慣れてきた[9]。

妻はまだW教会に通っている。現在は教会学校の教師をやっているのでその任期が終わるま

---

[7] 韓国のキリスト教で巫俗信仰と語られる場合には、プロテスタントであれカトリックであれ否定的なニュアンスである場合が多く、祈福信仰（Kiboksinang）と同様に捉えられている。この祈福信仰とは、この世での現実的な願いを実現させる現世利益の意味である。

[8] 通声祈祷（T'ongseong-Kido）とは韓国のプロテスタント教会でよくおこなわれる祈祷方法である。1907年に平壌から始まったリバイバル運動である大復興会で行なわれたものがその起源とされる。祈祷会などで信者が声を出して自分の祈祷を一斉におこなうもので時に熱狂的になったり、異言（英語での glossolalia のことであるが、韓国の教会では方言 Pangeon といい宗教的恍惚状態で発せられる意味不明な言葉をさす）をおこなったりする。1980年代までは多くの保守的教派では金曜日の夜におこなう徹夜祈祷会など限られた場面でおこなわれていた。通声祈祷は世界最大の教会となった純福音教会で使われたためにプロテスタント教会全体に広まったとも言われる。最近では日曜日の礼拝などにも取り入れられプロテスタント教会の祈祷として一般化している。特に信者数の減少を問題視し、信仰の活性化を強調する教会で顕著である。

[9] 律動（Yultong）は福音聖歌（ゴスペル）などの歌を歌うときに、歌詞の内容に合わせて手を動かして表現する方法である。アメリカの宣教師たちが持ち込み、最初は子供たちの教会学校で教えられ、使われていたがこれも礼拝でおこなうことが多くなった。カトリック教会にも取り入れられており、ウェグァン聖堂でも若者を中心とするミサではおこなわれる。プロテスタント教会でもカトリック教会でも男性よりも女性が、年輩者よりも50才以下の若い世代の方が積極的におこなう。

ではW教会のメンバーである。ただ自分がカトリック教会に来て教理を学んでいるのでその時には聖堂に来て一緒に学んでいる。妻もいろいろとW教会については葛藤をかかえているけれども将来カトリックに改宗するかどうかは分からない。子供はソウルで大学院に通う息子と大邱の専門大学（短大）に通う娘がいる。二人ともプロテスタントの信者だが、息子は教会には不満を持っているようだ。娘は余り熱心ではなく時々妻と一緒にW教会に行くくらいである。

自分には兄が３人いて末っ子である。長兄と次兄はカトリックだが、すぐ上の兄は無宗教でチェサ（祖先祭祀）の際にも拝礼はしない。チェサは一番上の兄の家でおこなっているが兄もカトリックなのでチェサの際には神位は並べないで父母の写真を並べておこなう。自分はプロテスタントだったがチェサが悪いとは思わず、父母に対する礼儀だと思っている。しかし紙榜（Jibang）などの神位に拝礼するのは偶像崇拝になるのでいけないと思う[10]。兄嫁がチェサに対しては熱心で、やらなければいけないというので我々兄弟が引きずられているようなものだ。

W教会の信者としてあり続けるのに我慢が出来なくなり、2015年４月に牧師に財政のことで直接抗議をしてから辞めた。狭い町なので教会で親しかった人々からはいろいろと文句を言われた。辞めた後はW教会の信者たちとの交際は一切おこなっていない。カトリックに改宗した理由は特にないが、ハヌニム（キリスト教の神）への信仰はあり、カトリックに関心もあったので自然にウェグァン聖堂に足が向いた感じだ。自分では意識していなかったが、カトリック教会に対する興味が前からあったのだと思う。プロテスタントとカトリックの違いはまだ教理の勉強中であるのでよく分からない。ただいくつかの点で違いは感じている。

プロテスタントの方が教理に対する熱心さや知識はあると思う。ただ知識が先に立って行動が伴ってないように思われる。カトリックは知識においては劣るが、真心がありそれが行動力になっていると思う。その行動力が貧しい人を助けるなどの実践的な活動になっていて、心が温かいと思う。その原動力になっているのが、ハヌニム（神様）に対して根を張っていて謙遜を持っていて、それだから相手を認めていることだ。プロテスタントはどうも謙遜に欠けるような気がする。だから排他的になり相手のことを考えないのだ。

自分の中でカトリックに対して疑問に思っているのは聖母マリアについてである。W教会などプロテスタント教会でカトリックを批判するときに、カトリックはマリア教だと言って悪く言う。実際、聖堂にもマリア像があるしマリアに関する言葉も多い。しかしミサの中ではマリアについて語られることはない。信者にマリアについて質問をしても、自信を持って答えられる人がいない。ウェグァン聖堂の修道女に質問してみたところ、イエスのお母さんに対する尊敬の表示で自分の母親に対する礼儀のようなものだと言われた。まだ納得できていないが考えていきたい。

ウェグァン聖堂の神父はミサの中で神様の話しかしないので良い。W教会の牧師は礼拝の説教で自分の個人的な話しをそれも感情的になってするので嫌だった。牧師は説教では聖書と神

[10] 韓国のキリスト教にとって祖先祭祀は難しい問題である。カトリックが18世紀末に入ってきたとき、信者たちはローマ教皇庁の指示に従って祖先祭祀を偶像崇拝と見なし、おこなわなかった。朝鮮王朝政府はこれを問題として迫害をおこない註１のように多くの信者が殉教した。プロテスタント教会も同じく祖先祭祀をおこなわない。ところがカトリック教会は第２バチカン公会議（1962年～1965年）で世界各地の伝統的儀礼に対する尊重の立場からの見直しをおこない、祖先祭祀については祖先を神としないのであれば認めることとした。それで興味深いことに一般的に古くからのカトリックは位牌や紙榜（紙に書いた一時的神位で祭祀が終わると燃やす）などをチェサでは使用しない。しかし第２バチカン公会議で祖先祭祀が認められた後に信者になった場合には、儒教的な祖先祭祀をそのままおこなうことも多い。プロテスタント教会はそれを偶像崇拝だとみなしてカトリックへの批判をおこなったりもする。

様のことだけを語るべきだと思う[11]。

４．Ｊ氏の語りからみえるもの

３で取り上げたＪ氏の語りから何が見えてくるのかを考えて見たい。まずはプロテスタント教会の個教会主義についてである。韓国のプロテスタント教会は個別教会の独自性が非常に高い。同じ教派に属しているからと言って協力関係にあるわけではなく、どちらかというと信者の獲得をめぐって競争関係にもなる。

信者数を獲得するために大きな教会堂建築をおこない、信者数が増えるとより大きな教会堂をたてる。このような成長を維持するためには資金が必要であり、その多くは信者たちの維持献金（毎月一定額を支払う）や建築献金によってまかなわれる。ただし多くの教会では財政は信者たちに公開されておりこのW教会のように非公開なのは珍しい。牧師が公開していないのはそれだけ教会内部における牧師の力が強いと見なすことが出来よう。２で触れた世襲問題を始めとするプロテスタント教会をめぐる問題の多くは牧師が握る力の大きさに起因することが多い。カリスマをもって信者の信望を集め教会を維持できるのであれば問題は起こりにくいが、カリスマの衰えなどによってそれまで表面に表れなかった問題の多くが露出する。また教会をめぐる紛争で多いのが牧師と長老との間の教会運営をめぐる争いである[12]。これらの争いが外部社会に露出すると教会のイメージは落ちる。信仰の場であるはずの教会が、現実の俗的な社会と変わりがないことに皆が気づいてしまうからだ。そしてこのような教会をめぐる紛争が巨大教会を含めて韓国では何例も起こってきた。

このようなプロテスタント教会の牧師をめぐる問題に対してカトリック教会は強みを持っている。何よりも牧師と違って司祭である神父はこの世を捨てた存在であるからだ。特にウェグァン地域のように聖堂の司祭が修道院所属の神父である場合にはそのように見なされる。もちろん神父が問題を起こさないわけではないが、韓国では牧師と比べて問題になる例が比較的に少ないのも好感度が高いことに通じるであろう。

次にＪ氏が語った教会間の格差の問題である。1990年代以降の信者数の減少は小さな教会が単に閉鎖するだけではなく、大きな教会への信者の集中という現象を生み出した。丁度、現実の韓国社会で1990年代終わりからの経済危機によって、少数の財閥中心の経済構造へと二極化がより進んでしまったようにである。巨大教会はより巨大になり、小さな教会はその運営に窮することになる。もちろん財政面で豊かな教会は小さな教会を資金的に支えていることも多くある。ただそれは牧師や長老などの個人的な関係によってなされることが多く、制度的に大が小を支える構造を持っているわけではない。これは前にも述べたように個教会の独自性が強く、この支援の問題も個別の教会に任されているからだ。

---

[11] カトリック教会とプロテスタント教会の違いはミサと礼拝という儀礼のあり方にもある。ミサは聖体拝領つまりイエスの体の記念としてのパンと血の記念としてのブドウ酒を受けることを中心に組み立てられており説教はその一部分にすぎない。もっともブドウ酒は特別の祭日でない限りは司祭のみが飲む。ミサは毎日おこなわれるが、日曜日以外のミサでは説教をしないことも多い。礼拝は牧師の説教がその中心を占めている。プロテスタント教会では聖餐式といってパンとブドウ酒を受け教義上秘蹟（サクラメント）とされ重要視されてはいる。年に２度（クリスマス前と復活祭前）から毎月１回くらいの回数でおこなわれ毎日曜におこなうことはない。Ｊ氏はまだカトリック教会の洗礼を受けていなかったので聖体拝領は受けず、神父に按手だけをしてもらっていた。

[12] これに関しては［秀村　2002］を参照のこと

これに対してカトリック教会は全体として対応する逆の構造を持っている。教区を基礎として信者数に応じて聖堂が計画的に配置されるので聖堂間の競争は起こらない。しかし信者の側から言うとプロテスタント教会は自分で選べるが、カトリック教会は原則として居住地によって聖堂が決まっていることになり、自由に選べないという不満がない訳ではない。信者を集めるための聖堂間の競争がないため競争的に投資をする必要も無く、教会の持っている資金は社会への還元に使用しやすい。Ｊ氏が語るカトリック教会の「温かさ」は競争的にならなくても良い余裕から生じているのかも知れない。カトリック教会が展開するレジオ・マリエ（奉仕と祈祷）やビンセンシオ（貧しい人への奉仕）などの奉仕活動はウェグァン聖堂でもおこなわれており、このような日々の地道な奉仕活動によってカトリック教会は社会からの信頼を得てきた。もちろんプロテスタント教会でも奉仕活動はおこなわれるのだが、多くの場合は個別教会単位であり持続力に欠ける点はいなめない[13]。

Ｊ氏は祈祷についてはプロテスタント教会でおこなわれる通声祈祷に対する違和感について述べていたが、祈祷方法はカトリック教会とプロテスタント教会とでは随分と異なる。プロテスタント教会では個人と神との関係は、個人一人一人が神と繋がる（万人祭司）と考えていて祈祷は基本的に個人がおこなうものである。そのため礼拝中におこなう牧師の祈祷や長老がおこなう代表祈祷も個人のものである。それに対してカトリック教会では神の代理人たるローマ教皇を頂点とした教会制度の中で信者は神と繋がることになり、祈りも司祭を通しておこなわれるのである。祈りは祈祷書に定められている祈禱文を覚えていく。個人的な祈りが全くないわけではなく、ミサの中でも個人の短い祈りが読み上げられるし、ただし信者たちの集まりで個人の祈りがなされることもある。韓国におけるカトリック信者数の増加と祈りとの関係については改めて考えて見る必要がある。

５．おわりに

1990年代以降信者数を減らしてきたプロテスタント教会と信者数を増やしてきたカトリック教会はそれぞれに韓国社会に関係してきた。高度経済成長期の韓国社会には競争的なプロテスタント教会の生き方が適合的であったし、信者たちも将来はより豊かな生活を望み、それを約束する言説に満ちた牧師たちの説教が好ましかった。プロテスタント教会の組織原理は企業の持つそれと類似しており、信者の獲得に向けて教会同士が競い合い、競い合うことによって相乗効果を生み出し、より多くの信者を獲得していったのである。ただ競争の顕在化は他者との共存よりは個別教会中心の生き方になりやすく、1980年代までの信者数が増加していた時代には分かち合えていたパイ（信者）を1990年代以降は信者数減少の中で奪い合うことになった。

1990年代に入り韓国社会は相対的に豊かな社会となったが、1990年代終わりには経済危機を経てさまざまな格差が顕在化することになった。高度経済成長期のように将来に対する楽観的な見方が少なくなる一方で、人々はそれぞれの生き方をそれまでのような量的な拡大のみでは考えなくなっている。そのような中で競争的なプロテスタント教会よりも他者と寄り添ってきたとみなされているカトリック教会が信者数を増加させてきたのも人々の生き方が変化してきたことの反映だと言えよう。Ｊ氏の語りは一事例に過ぎないがそのような見方を示してくれる

[13] プロテスタントの個別教会でおこなう奉仕活動は、教会の名が入ったお揃いのユニフォームやたすき掛けでおこなわれることがあり教会の宣伝行為と見なされることもある。社会奉仕活動もまた競争的におこなわれていると言ってもよいかもしれない。

ものである。

カトリック教会の組織、日常活動、地域との係わりなどをプロテスタント教会のそれを念頭におきながらより具体的に検討していくのがこれからの課題である。

参考文献

최형묵，백찬홍，김진호 2007『무례한 자들의 크리스마스』평사리、(金忠一訳 2014『無礼者たちのクリスマス―韓国キリスト教保守主義批判―』かんよう出版)。

최형묵 2009『한국기독교와 권력의 길』우야기쟁이 낙타、(金忠一訳2013『権力を志向する韓国のキリスト教―内部からの対案』新教出版社)。なお原著は2013年に改訂増補版として表題を『한국 기독교의 두 갈래』に改めて出版された。

조세희 이재혁 2013「왜‘느슨한’교회가 성장하는가？：합리적 선택론에서 본 한국 그리스도교의 교세변화」『한국사회학』47（２），pp.61-100.

秀村研二　2002「牧師と長老をめぐる葛藤：韓国A教会の紛争」伊藤亞人、韓敬九編『韓日社会組織の比較』慶應義塾大学出版会、pp.227-242。

秀村研二　2015「教会の生き残り戦略―変化する韓国社会とキリスト教―」小島敬裕編『移動と宗教実践―地域社会の動態に関する比較研究―』（CIAS Discussion Paper No.470）京都大学地域研究総合センター、pp.81-89。

ICPSR 2008 http://www.icpsr.umich.edu/icpsrweb/ICPSR/studies/34664

김진호 2012『시민 K 교회를 나가다 한국 개신교의 성공과 실패 그 욕망의 사회학』현암사（香山洋人訳　2015『市民K、教会を出る―韓国プロテスタントの成功と失敗、その欲望の社会学』新教出版社)。

길성건 2013「고도성장 이후의 한국교회 : 종교사회학적 고찰」『한국기독교와 역사』38호，한국기독교역사연구소，pp.5-50.

윤경로 2015「분단70년，한국 기독교의 권력유착 사례와 성격」한국기독교연구소・한국기독교역사학회 학술심포지엄『분단 70년，한국 기독교의 성찰과 반성』2015.12.5（한국기독교회관 조엘홀)，pp.23-45.

왜관수도원 2009『芬道通史』芬道出版社（原文はJohamnes Mahr 2009 “Aufgehobene Hauser”）

Changes in Lifestyle due to Christianity in Korea: Life as a Protestant or Catholic

HIDEMURA Kenji

This study considers the major changes in Korean Christianity which occurred in the 21st Century. Since the 1960's, as the workforce moved to the city due to economic growth, the number of Protestants increased. Protestantism characterized by the independence of each church showed a close affinity with the competition, which is one of the basic theories of capitalism. The number of believers contained in all the Protestant churches increased because of the competition among churches to gain believers. As a side effect of this trend, Protestant pride also appeared.

In the 1990's, the number of Protestants decreased, while the number of Catholics doubled during 25 years. It appears that the IMF economic crisis and the bankruptcy of Lehman Brothers fundamentally altered the Korean social structure of the 20th century. There can be seen a wide disparity in the society. A lifestyle regarded as uncommon during the period of high economic growth (when people believed that anyone could become rich) became necessary. Under such circumstances, Catholicism, which does not emphasize the competition, gained support and the number of its believers increased. The growth strategy used by Protestant churches during that period turned to a negative factor in the 21st Century. On the other hand, the social service activities carried out by Catholic churches faithfully have gained appeal for many people.

This paper discusses the issues that churches of Korean Protestantism are facing and the matters that are expected to be done by Catholicism. This research is based on an interview with a Catholic living in Waegwan, South Gyeongsang, who was once a Protestant.